



人間牧場主  
若松 進一

## 地域資源を活用した 地域再生

最近では食料品の生産地表示が義務づけられて、どこの売り場に行っても「〇産」などと書かれた生産国、生産県、生産者が目立つようになってきました。中には生産者の名前や顔までも表示したものであって、安心安全が何よりの食料品を選ぶ側にとっては喜ばしいことなのですが、加工品などについてははまだまだその表示があいまいで、法の目をくぐって儲けようとするしたたかな人もいるようです。

元々日本は戦前まで地産地消の進んだ国でしたが、高度成長の波に乗って貿易や物流が盛んとなり、物の豊かな大量消費時代を迎えてから、金さえ出せば何でも手



川のほとりの小さなケーキ屋さん

に入る時代になって地産地消でなくなつてしまいました。真冬に旬でもないスイカが回り、日本人でありながらペットボトルに入ったカナダの水を飲み、餃子は焼くだけでOKの安い半調理品が隣の国から送られてきて、私たちは何の疑いもなくそれらを口にして日々の暮らしをしてきたのです。

ある有名な野球選手が40歳の若さで成人病に侵されました。その人は試合の度に全国を転々として、美食の限りを尽くしてきたようです。私たち庶民からみれば羨ましい限りなのですが、美食は高カロリーや片寄った栄養になって蓄積し、ついには体が動かなくなつてしまったのです。昔はお金持ちの病気といわれていた糖尿病などの成人病が広く国民に広がり、日本国民総病人といってもおかしく

ないような状態になっていっています。その人が回顧録の中で「私は美味しいものを沢山食べました。高級食材を使った食べ物にエネルギーの源と思っていました。飽食の限りを尽くした挙句がこの不始末です。人間は自分の家の周囲10キロ内で作られたり採れたものを食べれば間違いない」と言っているように、暮らししているその土地の食べ物や飲み物を口にすればいいのかも知れません。この人の言うのが正しければ健康の源はやはり地産地消が原則だと思ふのです。

最近では農業も漁業も分業化が進み農家であっても味噌や漬物は作らず買って食べるし、漁師さんも煮干しで出汁をとるようなことは殆どしなくなりました。地産地消といくら叫んでも、学校給食に出される食材は入札によって安いものや半調理品が使われるような仕組みになっているのです。

漁家の子どもたちに魚の絵を書かせれば、スーパーで売られている切り身の絵を描いたという話には驚かされますが、農家の子どもたちだってキュウリやトマトの花の絵を書かせても、見たことがないから書けないというのと、どこか似通っているような気もするのです。

地産地消で思い出すのは高知県旧西土佐村の中脇裕美さんです。中脇さんと知



松山市大街道での販売風景

り合ったのは3年前です。中脇さんは役所の産業課職員として、むらおこしの最前線に立って活躍していました。人間牧場を訪ねて来て、私に講演を依頼されました。しかもそれが半端な数ではなく20回も集落へ足を運んで欲しいというのです。往復250キロを宿泊することもなく約3ヶ月でこなしましたが、そのつれづれに地産地消の話をしました。彼女は自分の理想を追うため引き止める私の話も聞かずその年度末に役所を辞め、自立して「山間屋」という小さな会社を興しました。旧西土佐村の中心地にある空き家同然の家を借り受けて活動しています。中山間米を主要商品にして様々な商品を手掛けようとしています。中脇さん

の販売戦略は地産地消を一步進めた地産外商なのです。地産地消といっても、定住人口の少ない、ましてや交流人口も余り期待できない田舎での地産地消などという待ちの姿勢では、経済的な成果も期待できないのです。

中脇さんは一週間に一度、四国では大消費地と思われる松山市の商店街に地産商品を持って出張販売に来ているのです。「四万十」というブランド名をフルに生かして地産外商を心がけていますが、毎回10万円程度の売り上げがあります。勿論売上全てが儲けではありません。田舎に暮らすおぼちゃんたちの作った100円、200円の小さな商品を寄せ集めて委託販売するのでから集出荷を含め気の遠くなるような商売です。でも田舎のおぼちゃんたちの期待を一身に集め、お菓子なども手掛けて意欲满满で、会えば必ず愚痴など言わず夢を語ってくれます。「ああここにもやる気の人がいる」と頼もしく思っで見守っています。

つい最近聞いた話ですが、霞が関の農林水産省に勤め地産地消を推進しているお役人が、現地視察と称して島根県へやって来たそうです。県から連絡を受けた町の農業担当者は作業着や長靴を用意して、水田再編対策事業、つまり減反政

策奨励作物として作っているソバ畑を誇らしげに見学させました。霞が関のお役人は山間のピンクのソバの花にいたく感激しましたが、帰り際「今度来るときはうどんの花を見たい」と言ったそうです。ソバにソバの花が咲くのは当たり前ですが、小麦にうどんの花が咲くのでしょうか。少しピントがずれていて、こんな頭に霞がかかった人が地産地消を幾ら東京で論じてみても、農家の暮らしは決して良くならないのです。

地産地消は健康と経済もさることながら、田舎に暮らす人たちが生き生きと輝いて生きることには本当の意味があるのです。市町村合併が進んで行政サービスが遠のき、学校が統合されたり限界集落も目立つて増え、このままだと地域の自立もおぼつかなくなってきましたが、足元にある地域資源を活用して地域再生に取り組む以外生き残ることはできないのです。

無異な話 ソバにソバ花 咲くけれど  
うどんの花は 何に咲くのか  
辞めるなど 止めたが辞めて むらおこし  
輝き人は 逞し生きる  
片道で 百五十キロの 道程を  
地産品々 積んで外商  
百円の 品を集めて この地まで  
商魂凄い 儲けて帰る  
(若松進一笑売啖呵より)